

## 2022年度 東京外国語大学 国際社会学部卒業生に贈る言葉

国際社会学部卒業生のみなさん、本日のご卒業まことにおめでとうございます。

みなさんは本日、大学の卒業証書にあたる学位記、ディプロマを授与されます。本学では、4年間の学士課程を修了する時点で卒業生に身につけていただきたい五つの能力を、ディプロマ・ポリシーに掲げてまいりました。それは三つの知識と二つの力のことです。三つの知識とは、第一に専攻言語に関する高度な知識、第二に専攻地域に関する十分な教養、第三に特定のディシプリンをふまえた専門的な学識を意味します。二つの力とは、現代社会を生きる力、そしてみずから主体的に考え行動する力のことです。みなさんには、この五つの能力すべてが高度に具わっていることが、本日お渡しするディプロマによって公式に証明されたことになるのです。

なかでも「現代社会を生きる力」には、ことのほか意味の奥行きがあるものとかねて私は受けとめてまいりました。現代社会を生きる力という、一見それは、グローバル化した今日の荒波を生き抜く強い力のように聞こえるでしょうが、本学にとってこのことばは、自分だけが社会で勝ち抜けばそれでいいといったサバイバル能力を意味してはおりません。ここでいう現代社会とは、言語や文化のちがいかぎらず、社会的に多様な背景をもつ人びとと共に生きていくことが求められる場所を指しているからです。たがいの立場や背景のちがいを尊重しながら人が共に生きていくことは、国際社会学部で学んできたとおり、口で言うほど簡単ではありません。むしろそれがけっして簡単でないからこそ、世界各地で生きる生身の人間の声に直接ふれて、その声は何を訴えているかを繊細に受けとめるために、きょうまでみなさんは、言語と、地域と、そして専門分野の知を通じて、多文化共生のもつ意味を学ばれてきました。多文化共生の「多文化」とは、自分の外側にあつて一、二、三と数えられるような複数形の文化ではありません。多文化とは複数のオブジェクトではなく、他者の声としてたしかに聴き届けられ、いつしか自分の内側で育っていくさまざまな想像力への扉を意味しているからです。

その扉のありかを直感していただくために、今から900年ほど前、西暦12世紀にフランスの修道院で生きたある学者が遺した言葉を、わたくしはきょうのみなさんにお贈りしようと思います。

「自分の祖国を麗しいと思う人は、まだまだ未熟な青二才である。やがてどのような国でも自分の国だと思えるようになった人は、すでに強靱な魂をもっている。しかし完璧な人間はただひとり、自分にとって世界全体が異邦と感ぜられるようになった人である」。

この言葉のように、だれかと共に生きていくということの深い意味にふれる経験はいつでも、自分が世界全体にとっての異邦人となるその瞬間にはじまります。みなさんが国際社会学部でこれまで着実に学ばまれてきた多文化共生の深い意味を、折にふれて社会の現場で思い起こしていただければ幸いです。

最後に、私たち国際社会学部の教員は、このキャンパスでみなさんとふたたびお目にかかる日が来ることを心待ちにしております。これから本学の卒業生として、さまざまな分野でめざましくご活躍されることを、心よりお祈り申しあげます。

本日はまことにおめでとうございます。